

## 市来津由彦著『朱熹門人集団形成の研究』

著者	吾妻 重二
雑誌名	集刊東洋学
巻	89
ページ	94-102
発行年	2003-05-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00132590">http://hdl.handle.net/10097/00132590</a>

# 評書

市来 津由彦著

## 『朱熹門人集團形成の研究』

吾妻 重二

### 1

本書は宋代道学の研究にとりくんでこられた市来氏（以下、著者）が、博士学位論文を増補改訂して成ったものである。評者はこれまで著者の研究からさまざまな示唆を受けたが、とりわけ十年ほど前からたて続けに発表される朱熹とその門人に関する論考に、著者の並々ならぬ熱意を感じてきた。それらがこのたび一書に集成されたのは著者にとって一つの区切りであるとともに、評者を含む他の研究者にとつても著者の論をまとめて目にしうる便宜を提供するものであって、まずは本書の刊行を慶びたい。

評者はかつてアメリカの宋代思想研究を紹介したい、彼地において士人知的エリート<sup>1</sup>の思想と行動を歴史的文脈の中に位置づける研究が盛んであり、学術思想を社会史

や政治史、教育、地域研究などと関連づけて立体的にとらえなおそうとする動向が顕著なことを指摘したが、ここには従来の関心が「觀念史」に偏するあまり士人の知的世界の広がり<sup>2</sup>をうまく説明できていないという反省がある。著者の研究も、はつきりとは明言はされていないが、おそらく同趣旨の方法論的反省に裏づけられているのであって、ここに著者の視点の新しさを見ることができよう。以下、本書の内容紹介をおこない、あわせて論評をいくらかつけ加えてみたい。

はじめに本書の構成を目次によって示しておく。

### 序説

第一篇 朱熹思想形成の場——北宋末南宋初の閩北程学

第一章 北宋末における程学の展開

第一節 程門初伝と二程語録資料

第二節 陳淵の思想——北宋末南宋初における道学継承の様態

第二章 南宋初の程学と閩北における朱熹

第一節 閩北における朱松と朱熹——程氏語録資料の収集をめぐる

## 第二節 朱熹の「雑学弁」とその周辺

## 第二篇 朱熹門人・交遊者の朱熹思想理解

## 第一章 四十代までの朱熹とその交遊者達

## 第一節 福建における朱熹の初期交遊者達

## 第二節 何鎬と朱熹——福建初期交遊者の朱熹説理解

## 第三節 廖德明——福建朱熹門人從学の様態

## 第二章 乾道・淳熙の学——地域講学と広域講学

## 第一節 乾道・淳熙における士大夫思想交流

## 第二節 朱熹・呂祖謙講学論

## 第三節 浙東陸門衰變と朱熹

## 第三章 五、六十代の朱熹とその門人、交遊者達

## 第一節 朱熹五、六十代の門人、交遊者達

## 第二節 呂祖僉と朱熹——朱熹広域講学の展開

## 第三節 陳文蔚における朱熹学説の受容

## 第四節 朱熹祭祀感格説における「理」——朱門における朱熹思想理解の一様態

## 第五節 朱熹晩年の朱門における正統意識の萌芽

——呂祖僉と朱熹・朱門の講学を事例として

## 結びに

このように、本書は第一篇と第二篇に大別される。おおまかにいえば、第一篇では二程の初伝再伝において程学（道学）がいかに福建地方に伝えられたかを論じ、第二篇では、道学が福建という一地域を越えて講じられ、朱熹思想が南宋の士人社会に定着していく過程が検討される。福建という「場」を中心とする道学の収斂と伝播を多角的に論じることが本書の主眼である。

まず、序説は本書の課題と資料の扱い方などについて述べるとともに内容について要約しており、全体の構成を知るのに便利である。

第一篇では北宋末・南宋初における程学の様相が論じられる。その第一章第一節では、『程氏遺書』所載の語録を記録者ごとに分類し、「理」その他の話題の発言分布を調べたうえで、二程の思想は程顥在世中の「二先生語」（巻一から巻一一）が基礎となり、なかでも巻二の呂大臨録が程学の特色をきわだたせているとする。ついで、程門初伝の高弟に「理」よりも「心」を尊重する志向が強いことを挙げ、その主な理由を彼らの節事時期および、新法党の迫害によって程学が地方逼塞の精神保持の学として機能するように

なった点などに見る。かかる心学化は、著者によれば南宋における程学の一基調をなすものであつて、このあとの議論においてもたえず言及される。

第一章第二節では、楊時の門人・陳淵を通して福建北部（閩北）における程学展開の様相が論じられる。陳淵の経歴を考察したのち、「誠」と「未発」を強調するその思想が楊時の継承であること、仏学への共感を有することを指摘して、陳淵に「程門初伝再伝における仏学に対する道学の接近のきわまつた姿」が見られるとする。閩北の程学にはこうした儒学仏学併存の風気が典型的に伝わっており、それは学縁・地縁によるつながりに支えられていた。そして朱熹の父朱松や、李侗師事以前の朱熹も、こうした人脈における思潮の枠内にあつたと指摘する。

第二章第一節では、前章で朱熹以前をもつぱら論じたのをうけて、朱熹の側に視点を移す。閩北に存在した楊時系の程学人脈（楊時、胡安国、羅從彦、陳淵ら）の中で程氏語録資料が収集され始め、それが朱松の手に集まつた経緯を論じ、さらに朱熹が『程氏遺書』『程氏外書』として校訂整理したテキストが朱松本を一底本にしていたこと、胡文定本（胡安国）、陳氏本（陳淵）を朱熹が集めることができ、たのも福建程学人脈の中に朱熹がいたためであることを、

実証的に明らかにしている。

第二章第二節では、朱熹の定論確立直前に著わされた「雑学弁」をとりあげ、その思想的意義を論じる。「雑学弁」で批判の対象になったのは蘇軾、蘇轍、張九成、呂本中であり、各人の思想の特色と、それを批判する朱熹の立場が考察されている。すなわち、張九成と呂本中が、人脈的に（一）程学派、（二）「悟入」を説く江西詩派、（三）大慧宗杲の三者と関わりをもつこと、「心」の作用とその覚醒を第一義的に追求する特徴が見られること、蘇軾と蘇轍の思想にもまた類似的の傾向性があることを明らかにする。これに対し、「心」の悟入ではなく、確固とした「性」に信頼を寄せる立場を表明した「雑学弁」を、南宋初の程学系思潮に一つの総括を与えたものと位置づける。本節は、朱熹思想の成立を南宋初の思想的展開の中に広く位置づけた力作といえよう。

第二篇は、朱熹門人集団の形成とその講学結合のあり方を詳論した、本書の主要部分をなすものである。著者の視点は朱熹の思想的営為の過程そのものにあり、門人・交遊者との議論を通じて朱熹グループが形成されていく点に大きな関心を払っている。かくして、彼らの出身や経歴、人脈について、諸伝記資料のほか、近年の考証研究をふまえて網羅的な調査がおこなわれる。そしてこれにもとづき、朱

熹の四十代までと(第一章)、五、六十代(第三章)の二つの時期に分け、その間に呂祖謙および陸九淵を中心とするグループに関する考察をはさんでいる(第二章)。

第一章第一節では『朱子文集』所収の書簡を主な根拠として、(一)四十歳以前の交遊開始者、(二)四十代前半期の交遊開始者、(三)四十代後半期の交遊開始者を、それぞれ福建北部、福建南部、福建外に分けて洗い出し、四十代までの朱熹の初期交遊の広がりが基本的に福建内にとどまると指摘する。ついで、数名の門人との間でかわされた書簡によって、この時期、儒仏融和論の克服、地域士人としての修己治人の思想の意義が交遊者たちと共有されていく過程を論じている。

続く第二節と第三節は、第一節が全体的状況を検討したのに対し、個別事例として何篇および廖徳明のケースをとり上げている。朱熹との交流の経過を詳細にあとづけ、彼らが南宋初期程学の「心」を重視する傾向をひきずっていること、朱熹がそのような閩北程学の思想的土壌からの自立をはかっていたことが論じられる。

第二章第一節は、乾道・淳熙年間すなわち朱熹の思想が成熟した四十代から五十代頃の時期に道学の思潮が幅広い展開を見せたことを、呂祖謙・陸九淵グループの活動を通

して素描する。著者の用語によれば、この時期は、道学が近接地域の士人層を中心とする「地域講学」とともに、各地域間と中央を含む「広域講学」のネットワークを形成して発展していった時期であって、こうした講学ネットワークの広がりが、多彩な士大夫学術が興起した「乾道・淳熙の学」をつくりあげたとする。

第二章第二節では、金華婺州における呂祖謙の講学活動が考察される。まず朱熹・呂祖謙の交遊関係を詳細にたどり、心の権能を重視する胡宏の影響下にあった呂祖謙が当時、道学勢力伸長の重要な担い手であったことを確認する。さらに講学の様相について論じ、呂祖謙人脈が「中央における科挙および官僚システムに由来する結合」に傾くのに対し、朱熹人脈が「地域社会における結合」に傾くという興味深い指摘をおこなっている。

続く第三節では、陸九淵グループのうち浙東陸門の性格を、袁燮を通してうかがう。浙東陸門が形成される経緯をあとづけたのち、「敬」を重視する袁燮思想が、朱熹との対決色を強める以前の陸九淵前期思想の影響下にあるとする。そして「心の陶冶の学」と「読書の学」の二面に着目して袁燮思想の特色を論じ、なぜ浙東陸門がのちに朱熹の学術に取り込まれるに至ったのかが論じられる。それは、朱

熹の学問論において「心の陶冶のプログラム」と「読書と文章作成訓練の学」が必然のものとして組み込まれていたのに対し、陸学においては両者が構造的にかみあわされておらず、よって当時の士人の学術受容に対する適合力が弱かったためだという。

第三章第一節では、五、六十代以降に朱熹と学的交渉をもった人物を『文集』所収の書簡と『語類』にもとづいて網羅する。五十代で区分けするのは、南康軍知事赴任を境に朱熹の学説が広く認知されるに至るからであって、この時期以降が朱熹門人集団の実質的形成期にあたる。データの検討の結果、この時期に福建外の師事者が増加すること明らかにするとともに、『文集』の書簡多数収録者と『語類』の多数記録者のうち十六名を朱熹門人集団の核として見出し、それぞれの履歴を詳しく紹介する。さらに、この十六名と科擧との関係に着目し、進士合格者のみならず、合格に至らないまま地域に生きる士人にとっても朱熹学説が有効に機能していたと説く。

第三章第二節では、呂祖謙の弟呂祖僉との交渉を通じて、呂氏グループと朱熹との関係を論じる。『朱子文集』所収の呂祖僉宛て書簡を、(一) 呂祖謙在世期、(二) 呂祖謙の死後、(三) 偽学の禁の時期の三期に分けたうえで、主に第二期につい

て考察し、もともと胡氏湖南学に共鳴していた呂祖僉が、この時期、陸学や陳亮の事功説に共感していくことを指摘する。そして、呂祖僉に対する朱熹のはたらきかけを調べ、朱熹が呂祖僉を自説陣営に取り込むのに成功したとする。これは、呂祖謙亡きあと、朱熹が呂氏の学に対して主導権を握り自己の学説の学派的自立を実現していく過程として捉えられる。

第三章第三節は陳文蔚の朱熹学説受容をとり上げ、朱熹五十代以降における門人の従学様態を追う。諸資料にもとづいて朱熹との交渉を丹念にあとづけ、陳文蔚にはもともと尹焞系の道学が下地としてあったこと、朱熹の門人となった動機が科擧をめぐる心の葛藤にあったこと、それを克服する朱熹の「為己の学」に惹かれたこと、「理」についての議論が陳文蔚のグループにおいて話題となっていたことが論じられ、講学を通じて朱熹学説が普及していくさまが描かれている。

第三章第四節は、やや角度を変えて、祭祀感格説における「理」の説き方について分析を加え、問者と朱熹の立場上のずれ、緊張感の中から朱熹の祭祀説がたちづくられていくとし、「朱熹の言葉が門人とのやりとりという協同作業の中で表出され固着していく有り様がうかがえる」(二一

頁)という。

第三章第五節は、朱熹の晩年、門人によって朱熹説繼承の正統意識が形成されるさまを、呂祖儉宛ての書簡によって論じている。『中庸』論議と「浩然の氣」議論を検討した結果、慶元年間においても、呂祖儉の発想に胡氏湖南学の影響が残るとし、さらに朱熹の万人傑宛ての一書簡に注目して、この時期、朱熹の門人に朱熹その人を開祖として崇める意識、そしてみづからがその学の正統的繼承者であるという「門人」意識の萌芽を見る。

そして最後の「結びに」では、本書の意図を再度説明し、残るいくつかの問題点について触れている。

## 2

本書の叙述は多岐にわたり、時に微細な論点に分け入るが、以上が評者の理解しえた範囲での概要紹介である。冒頭に述べたように、本書のテーマ自体が新しい問題設定なわけだが、評者の目から見て、具体的には次のような成果を注目すべきものとして挙げるができると思われる。

第一には、朱熹思想の出現を、福建地域における程学伝播の過程の中に位置づけたことである(第一篇第二章第一

節および第二篇第一章)。これを読むと、朱熹の思想が、学縁や血縁によって結ばれた閩北の思想的土壌から育まれたことがよくわかる。我々は二程―楊時―羅從彦―李侗―朱熹という直線的な「学統」をイメージしがちであるが、本書が明らかにした程学系士人の多くの存在は、そのような見方の狭隘さを教えてくれる。

第二に、程学初伝以降、南宋時代に至る道学において「心」尊重の思想が広範に存在していたことの指摘が挙げられる。二程の高弟をはじめ、胡安国、張九成、呂本中、陳淵、羅從彦、朱松、呂祖謙、あるいは朱熹の多くの門人においても、そのような傾向が見られることが明らかにされたのである。右のことは「理」にもとづく朱熹道学の独自性を説明しうるとともに、程学とは何であったかについて再考を促すものであろう。

第三は、朱熹の門人・交遊者についての克明な調査である。先行研究によつてはいるが、ここまで網羅的な調査はかつてなかったのであつて、本書で明らかにされた事実関係が今後の朱熹学派研究の基礎となることは間違いないであろう。なかでも朱熹門人集團の核として十六人の門人を抽出したことには感心した。従来、朱熹の門人は個別的に考察されるにとどまっていた、朱門というまとまった観点

からとり上げられたことが少なかつたからである。朱熹を中心とする人物交渉関係を八つの表と四つの図によつて整理しているのも、著者の苦心のあとをしのばせるものである。

第四には、朱熹学説の普及を年代をおつて検証した点が重要である。四十代以前の彷徨期、四十代の定論確立ともなう福建内における同調者の広がり、五十代以降における福建外への影響力の拡大、晩年に顕著になる朱熹門人集団の形成という図式は、堅実な考証にうらづけられていてかなり説得力がある。本書は朱熹自身の思想的発展とともに、外部に向けてその学派勢力が段階的に拡大していった過程をよく描き出していると思われる。

このように、本書は大きな視野と緻密な資料解説にもとづく労作であり、さまざまな成果が見出されるのであるが、評者の目から見て気になる点もいくらかある。そのことを以下、三点にしばつて論じてみたい。

まず、右の第二点とかかわることであるが、程門初伝の高弟をはじめ、程学系の思想家たちが「心」を注視する傾向をもつのはなぜかという、思想解釈についての問題である。その主な理由を著者は、二程への師事時期と門人たちの自身の関心、および北宋末の社会状況などに求めているが

(七〇頁以下)、説明がまわりくどいように感じられる。評者はむしろ、程頤も程頤ももつぱら「心の陶冶」に主眼を置いていたと考えたい。つまり、道学は二程の門人に至つて心学化したのではなく、二程自身に本来、心学的要素が濃厚だったのである。このことはかつて論じたことがあるので繰り返さないが、門人や政治の事情よりも、二程の思想自身にその原因があつたと端的に考えた方がよいのではないか。客観的な「理」の探究を説く朱熹と二程との間には基本的な違いが存すると見られるのである。

第二は方法論にかかわる問題である。著者は朱熹人脈の広がりを、もつぱら『文集』巻三〇以降の「問答」関係の書簡によつて考え、「時事出處」に関する巻二四、二九の書簡や序・記・跋・祭文・行状類は除いている(第二篇の第一章第一節、第三章第一節)。これは講学的観点からの検討という意味でそうなのであろうが、学説の流布という問題を考える場合には、これら学的「問答」以外の諸資料に見られる政治的人脈も考慮すべきであろう。講学に直接加わつていなくても、朱熹の同調者や支援者は官僚士人中にいたからであつて、陳俊卿、趙汝愚、劉珙、周必大ら朱熹と親密な関係にあつた高官の意向は道学の普及に重要な役割を果たしたと予想される。つまり、学縁・地縁のみ



ならず、「官縁」についても考察を及ぼす必要があるわけである。<sup>(3)</sup>

また、朱熹集團の核として挙げられた十六人の中に蔡元定の名がないのも気になるのである(三七三頁以下)。これは「語類」の多数記録者を根拠の一つとしたからであるが、蔡元定が朱熹グループの中心的存在だったこと、子の蔡沈や蔡淵とともに、朱熹學術の形成に深くかわつていたことはいうまでもない。語録を記録しなかったが朱熹集團の核を成していたと考えられる人物は、他にも見出せるのではないかと思われる。

第三に、朱熹と科挙の関係についての解釈である。本書の出発点は、朱子学が中国社会においてなぜ流布するようになったのかということにあり(五一七頁)、かかる問題意識から朱熹、呂祖謙、陸九淵と「科挙システム」との関係が論じられている。このうち鍵となる朱熹の場合について、著者は、朱熹自身は挙業には否定的だったが、その學術には科挙に適合する要素が含まれていたため、結果として士人に認知されたと考えているようである(第二篇第二章)。しかしこれは、わかりにくい説明ではあるまいか。主観的には科挙との結びつきを拒否していたが、客観的には科挙と親和性があったという屈折した理解だからである。

この場合、士人社会に受容されたことと科挙試験とは、ひとまず切り離して考えた方がよいと思われる。朱熹が挙業に価値を認めていなかったことは明らかであり、呂祖謙のように科挙用の参考書を作ったわけでもない。朱熹の学説は、南宋時代においては挙業とは別のレベルにおいて広まったといえる。すると、広まった理由が問題になろうが、これは「どのような」と「なぜ」の二方面から考察することが可能である。「どのような」の面は関連資料を歴史的にトレースすることで明らかにできるであろうが、「なぜ」の面は、結局、朱熹の學術の何が当時の士人の関心を惹いたのかの問題だから、つまりは思想研究の対象になる。南宋時代、朱子学は、王安石の場合のように中央権力を背景として強制的に普及せられたのではなく、士人たちに自発的に受容されたからである。この二つの側面については本書でもある程度論及されているのだが、著者が「作業仮説的な論述にとどまる」と自述するように(五二二頁)、より注意深い検証が必要となろう。

以上、私見をまじえつつ述べてきたが、本書が朱熹研究に新たな光を投げかけたものであることは疑いのないところである。著者の今後の研究が待たれるとともに、我々も本書の成果をふまえることで、朱子学研究をより深化させ

ていくことができると思う。

（創文社、二〇〇二年二月刊）  
本文五二七頁、九〇〇〇円

注

- （1） 吾妻「アメリカの宋代思想研究——最近の状況」（『関西大学文学論集』第四六巻第一号、一九九六年）
- （2） 吾妻「重層的な知——朱熹窮理論の位相」（『宋代の知識人』宋代史研究会研究報告第四集、汲古書院、一九九三年）、  
「格物窮理のゆくえ——朱熹以後における二つの方向」（『関西大学文学論集』第五二巻第一号、二〇〇二年）。
- （3） 関長龍『南宋道学命運的歴史考察』（学林出版社、二〇〇一年）は、宋代全般について、道学の展開を政治史と関連づけて記述している。
- （4） なお、朱熹学団の発展を他の道学系グループとの交流・論争から研究したホイット・ティルマン氏の著作は、相し参照すべきものである。Hoyt Cleveland Tillman, *Confucian Discourse and Chu Hsi's Ascendancy*. University of Hawaii Press, 1992. これには中文訳がある。田浩『朱熹的思惟世界』（台湾・允晨文化実業股份公司、一九九六年）。